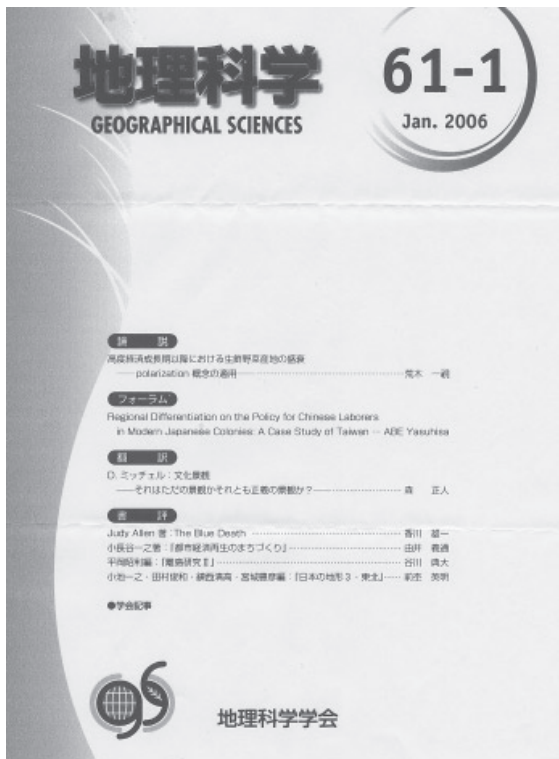




平岡昭利編：『離島研究Ⅱ』

海青社，2005，222 p.，2,800円（本体）

ISBN4-86099-212-1

「離島研究Ⅰ」が出版された際、評者はその多様な研究手法と充実した研究成果を「様々な島をフィールドにした研究のカatalog」であると評した。今回その「離島研究」がシリーズ化され、さらなる成果の結集がみられたことを、島に関心を寄せる一人として素直に喜びたい。

本書は、前書同様「島」の持つ多様な特性や環境について、12の事例から多面的にアプローチしており、前書に勝るとも劣らない充実した内容となっている。全体の章構成は前書とほぼ同様の構成を採っており、3部12章構成になっている。

I 島嶼の特性と移動と結びつき

- 1 章 島嶼住民の最寄りの中心都市での滞在可能時間（宮内久光）
- 2 章 奄美大島における住民の居住地移動（須山聡・鄭美愛）
- 3 章 沖縄県・浜比嘉島の架橋効果について（宮内久光・下里潤）
- 4 章 八重山諸島における遠距離通耕（浮田典良）

II 島嶼の産業構造とその展開

- 5 章 大東諸島の開拓とプランテーション経営（平岡昭利）
- 6 章 香川県・栗島における基盤産業の変容（河原典史）
- 7 章 壱岐・長島の漁業の持続性と漁業者の集团的機能（山内昌和）
- 8 章 五島列島・福江島における近年の小売業と消

費者購買行動の変化 (宮澤仁)

Ⅲ 島嶼の集落と生活行動

- 9章 八重山諸島・小浜島集落地と生活様式 (大城直樹)
- 10章 竹富島における町並み保存運動 (福田珠己)
- 11章 宮古諸島・伊良部島におけるアワ栽培の存続と地域社会 (嘉納章雄)
- 12章 山形県・飛島の人口減少と住民の生活行動 (山田浩久)

まず、第1部島嶼の特性と移動と結びつきでは、1章において日本の離島を対象にした計量的分析を行っている。前書では、島嶼地域の地域区分を1章で行っていたが、今回はより具体的かつ島嶼住民の生活に直結する最寄りの中心都市での滞在可能時間を明らかにしている。離島として一括りで考えても、その地理的な条件はそれぞれの島によって大きく異なるため、それらを一望できる地図 (p. 16) が描かれていることは非常に価値のある成果であろう。こうした基礎的なデータを踏まえ、後の章では、島嶼住民にとって切実な生活空間について、それぞれの切り口で迫っていく構成になっている。

2章では奄美大島の住民の居住地移動について、アンケート調査を用い、個人の移動経路を縦断的に分析する手法が採られている。島内の集落と中心都市である名瀬市、または本土との関係が個人の居住地移動を通して、また世代を超えて変化している様子が明らかになっているのは貴重な成果といえる。

3章では、離島の「半島化」= 架橋による本島との一体化が成され人口増加がみられた沖縄県・浜比嘉島について、特に転入者を対象にした調査を行い、緻密なデータからその詳細を明らかにしている。ここでは、同じ島内においても集落によって架橋効果が異なるという知見を得ているのだが、しかしその要因については詳述されていない。この点は、興味深いだけに何らかの方法でアプローチできないものだろうか。

4章では、故浮田典良氏が1960・1972年に行った調査をもとに八重山諸島で行われていた遠距離離通耕の様相を描いている。筆者の「今のうちに調査しておかないと、わからなくなる恐れがある」(p. 61) という指摘は、この成果とともに心にとめておきたい。

第2部は島嶼の産業構造とその展開である。前書では2部と3部に産業別で区分されていたが、本書ではこれらを纏めている。

5章では、大東諸島の主に開拓からプランテーション経営に至るまでの歴史的展開を論述している。孤立

性の強い離島における経営や政策の有り様が、経済的収奪の対象であったという指摘は、痛切なものである。島を「離島」と呼ぶことが好きになれない (p. 1) 編者でもある筆者の本書を取り纏めた強い意思が、この成果を通して明確に伝わってくる。

6章では、香川県・粟島の近世近代における、海運業から「船員の島」そして「養殖の島」へという歴史的な変遷が様々な資料を基に明らかにされている。1つの島が、大きな時代の変化を経験し今に至っていることが明らかにされた論考は、今の離島をみるうえで、その歴史的な背景に重要な意味があることを物語っているといえる。

7章では近年でも人口維持の傾向にある島である壱岐・長島の事例から漁業者の漁業経営や協調的行動によって、漁業の持続性が明らかにされており、前書の10章に続く成果といえる。個々の漁業者の営みと相互に支え合う協調的な行動とが、離島という文脈において理解されることで、漁業者、ひいては離島生活者の生活実態に迫ることが可能になっている。

8章では、大型店が出店した五島列島・福江島を事例に、小売業の変化と消費者の購買行動について論じられており、高購買頻度の財の地元離れと低購買頻度の財の通信販売への依存の増加が顕著にみられる傾向が明らかにされた。大型店舗の出店が可能であったことは、生活に利便性をもたらしたことに違いないが、今後購買行動の変化により通信販売がより利用されることになれば、結果として小さな離島においても影響が及ぶことが想像でき、興味深い事例である。

第3部島嶼の集落と生活行動では、島の生活文化についての興味深い事例が並ぶ。9章では、八重山諸島・小浜島の「場所のパーソナリティ」を、自然・社会・文化の特徴をとりあげ総体としての生活様式を論じる試みを行っている。さらに10章では、竹富島の重伝建地区の町並み保存運動において地域のアイデンティティ創出に赤瓦が利用されたことを解き明かしている。こうした試みは、これまでの記述的なアプローチとは性格を異にするが、多様なアプローチが結集されていることも「離島研究」の魅力である。

11章は、宮古諸島・伊良部島の事例からアワ栽培と収穫儀礼とが密接に関わりながら存続している様子を、その背景と竹富島との比較から明らかにしている。文化的景観としてアワ栽培をとりあげたことで、その地域社会の諸相が明らかにされた成果である。

12章では、3部の前章まで南西諸島の事例が続いた後としては、やや違和感があるが、急激な人口減少を

経験している山形県・飛島の事例が取り上げられている。高齢化の進展、就業構造や伝統行事の変容について明らかにされ、アンケート調査に基づいて、市街地での生活のために対岸の酒田市に所有する「別宅」の利用目的の変化してきたことを指摘している。こうした急激な人口減少を経験している島の調査は、7章でとりあげられた壱岐・長島のような人口維持型の離島と比較しても興味深いし、「今のうちに調査しておかなければ」という緊急性の点からも重要である。

さて、これらの12編は、いずれも地理学的研究として十分に価値のある成果といえるが、「離島研究」のさらなる進展を期待して、本書の問題点を指摘しておきたい。それは、本書のフレームワークである。

前書と同様の3部構成であったが、評者はこうした構成が島を対象にした地理学の分類として適切であるのか、という疑問を持つ。なぜなら、例えば1・8章の計量的な分析、2・3・7・11・12各章の島を対象地域とした事例研究、4・5・6各章のようなモノグラフ的記述、9章の場所のパーソナリティや10章の地域文化の構築に対するアプローチというように、3部構成以外の構成が考え得るからである。これが、編者が表明している「島嶼に適合するごとくの一律的な理論の確立には全く否定的」(p. 77) との見解に基づくものであるとすれば、「離島研究」は島を変え、時代を変え、変化の記述を永続的に蓄積していくだけであろう。

しかし、それだけで良いのだろうかとの疑念も浮上してくる。評者は島という複合体、多様性を持つ地域の把握のためには、そしてさらなる地理学的アプローチの進展のために、理論的な検討が必要であろうと考える。編者が地理学的研究の有効性(p. 1)を主張するのであればこそ、そうした努力が待たれる。

島を対象にした研究が、単に「島」を思う人々によって成されるだけの事例の蓄積ではなく、地理学にとって研究対象として、テストフィールドとして有効なものであるかどうかは、理論的な進展に掛かっているのではないだろうか。

以上のように、「離島研究Ⅱ」は先学の貴重な成果を一覧することができ、かつさらなる続編と今後の発展を期待できる1冊である。そして、まだ見知らぬどこかの「島」へと、好奇心をかき立てる良書としてお勧めしたい。

(谷川典大)